**意見陳述書**

私は１９５０年、コザ市（現在は沖縄市）で生まれました。その頃のコザ市には、黒人街と白人街が存在し、人種差別がひどい時代でした。さらに彼らの下に沖縄県民が位置するようなありさまでした。米軍機が住宅街の真上を飛び交い、騒音をまき散らしたり、パイロットの顔が見えるくらいの危険な低飛行がされたりと現在よりもひどい状況でした。そういう環境で育ってきていたので慣れてしまい、危険性や騒音には鈍感な子供時代だったと思います。

地域に基地があり、米軍人も多く住んでいる環境だったので、クリスマスシーズンになると、彼らが多くのプレゼントを抱えて小学校を訪問する事がありました。子供たちは歓喜して、プレゼントを心待ちにします。私もそのひとりでした。でも小学校６年生あたりになると、心から喜べなくなりました。今でも覚えている、悲しい思い出があります。プレゼント引き渡しの簡単なセレモニーのために、児童たちは校庭に整列しました。その時に米軍人さんが、たくさんのお菓子を校庭にばらまいたのです。私は驚き、戸惑ってしまいました。いくら紙に包まれたキャンディーでも、地面にばらまかれたら幼い自尊心でも傷つきます。彼らが沖縄や日本を対等に見てない表れだったと思います。私たちは彼らとは平等な立場でない事を子どもながらに理解しました。

私自身も成長するにつれ、沖縄の置かれた状況を段々わかり始めました。米軍機が住宅の上を低く飛んでいてもお構いなし、夜中であろうが明け方であろうが爆音をまき散らしても、独自のルールで運用する米軍。民間人が事件や事故に巻き込まれても、彼らは地位協定で守られ、公平に裁かれない状況なのに、どうすることもできないという虚脱感がありました。

沖縄から離れたい願望もあり、１９７２年に上京し、都内の証券会社に就職しました。華やかさにあこがれる年頃だったと思います。コピー取り程度の仕事でしたが、都会のＯＬ生活を満喫していました。そのような中、１９７４年、東京丸の内で三菱重工爆破事件が起こりました。通行人や商社マンなど、多数の犠牲者を出したテロ事件でした。このあたりは、仕事の用事で通る事もあるなじみの場所でした。驚きと衝撃が大きすぎて、絶対に忘れられない出来事です。自分たちの思想を貫く目的のために、多くの犠牲もいとわない行為は、とても許されるものではなく、怒りしかありませんでした。この事件で私は、社会に変化を求めるには、地道な運動や生き方で変えるしかないと思い知らされました。１９７５年、この事がきっかけになり、沖縄に帰省しました。足が地に付いた本当の自立というものを深く考えるようになり、農業をしてみたいと強く思いました。

そして、１９８４年、有機農業をはじめるために沖縄市から名護市に移住して、１９９５年までは、農地の近くの名護市羽地地区で生活していました。

１９９６年１月、沖縄市に住む母親が高齢になったので、辺野古に隣接する豊原地区に中古住宅を購入し、母と共にて移り住みました。この年の１１月に普天間基地の移設先に辺野古が浮上したので、沖縄市の基地騒音から少しは逃れられると思っていた私は、すっかり落胆してしまいました。けれど、こんな狭い沖縄で、ちょっと移動したぐらいでは逃れられるはずはありません。そもそも沖縄では、ほんの少し移動しただけで、なにかしらの米軍所在地にぶち当たります。そのぐらい基地が多く存在するのです。

引っ越した地域も米軍機の住来が多く、射撃訓練の爆音がひどい場所でした。

２０１８年と２０２２年の名護市長選で、小泉進次郎議員が現市長の応援演説をした事があります。「ぼくの住んでいる横須賀にも基地はあります」と彼は声高に言ったのです。沖縄だけに基地を押し付けてはない、と言いたかったのでしょう。たしかに厚木基地周辺の爆音騒音の被害はひどいと聞きます。それに最近では横須賀基地の排水からPFASが検出され、問題になっています。しかし、米軍基地の占める割合が神奈川県は2000ヘクタールに対して、沖縄は1万8000ヘクタールです。それゆえ被害も比べ物になりません。小泉議員には、もっと深く学習した観点から、沖縄だけに集中した基地の差別的な比重に関してのコメントをして欲しかったです。

危険な普天間基地の撤去は県民の願いでもあります。普天間基地の移設先にキャンプシュワブが候補地になったのは1996年、当時の橋本首相の「撤去可能な海上基地施設」のプランが出されたのがスタートです。「撤去可能な海上基地施設」であっても、名護市民は市民投票で「ＮＯ」の判断を示しました。しかし、当時の岸本市長が受け入れを表明したのです。彼は「撤去可能な海上基地」だったから受け入れたのです。「2005年には撤去可能な海上基地」はいつのまにか立ち消えになり、シュワブ沿岸部埋め立てになっていったのです。今までで、沿岸部埋め立てを容認した名護市長は1人もいません。自民党の小泉議員が応援した渡具知現市長も、一度も基地の容認を表明していません。名護市民が容認していない、シュワブ沿岸部埋め立てをごり押しするのは、民意に背く行為です。

玉城知事が私たちの民意を汲み取り、基地反対を貫き、軟弱地盤改良工事の設計変更を不承認とした事は、政治家としてまっとうな事だと思いませんか？民意に真摯に向き合い、良心的な裁判をしてほしいと切に願います。多くの県民が望んだ県外移設は、なぜ叶わなかったのでしょうか？2005年11月11日の全国知事会儀にての小泉純一郎元首相のコメントです「沖縄県の負担を軽減するのはみんな賛成だが、どこに持っていくかとなると、みんな反対する。賛成なんてだれもいない。」2014年12月24日、中谷元・元防衛大臣の就任会見でのコメントです。「沖縄の米軍基地は分散しようと思えば九州でも分散できる。理解してくれる自治体があれば移転できるが、米軍反対というところが多くてできない。」彼らの言葉は、責任ある立場であるにも拘わらず、無責任すぎる、まるで他人事のようなコメントです。このようなコメントから解るように、普天間基地の移設先は、かならずしも沖縄である必要はない、という事です。「どこも引き受けないから沖縄が貧乏くじを引いて頂戴ね」と言っているのと同じです。彼らは口をそろえて、普天間は世界一危険な基地と言います。それもなぜか、辺野古移設が既定路線になった1996年頃から言い始めました。県民は以前から普天間基地は危険だと訴えつづけてきたのです。彼らが世界一危険だと認識してから28年が経過し、移転先の基地が完成するのに、あと数十年かかる予想です。普天間を危険のまま見過ごすつもりでしょうか？普天間を危険なまま放置し続ける政府と、１９７４年に起きた爆破事件のテロリストの違いはどこだろう、と考えてしまいます。どちらも市民の命をないがしろにしているけれど、政府は裁かれる事はないのです。普天間基地を危険と十分認識しながら、放置し続けている政権側が、玉城知事の埋め立て不承認を法令違反と判断するのは本末転倒というものです。基地完成を待たず、１日も早い普天間基地の閉鎖を訴えます。そもそも新基地が完成しても、普天間が返還されるとは限らないと、２０１７年６月の防衛委員会で、稲田元防衛大臣がコメントしています。普天間飛行場は滑走路が２７００メートルだが、建設予定の辺野古の滑走路は１８００メートルしかなく、大型の航空機が使用できない設計になっています。そのために、大型の航空機の使用ができる代替の滑走路を米軍がさらに求めているからです。

辺野古新基地を差し出しても、米軍が普天間を手放さない可能性を、稲田元防衛大臣自ら説明してくれました。新基地建設後に普天間基地を返還するという確約が、米国とできてないのです。基地建設の妥当性は全くありません。名護市民の容認を得てない、軟弱地盤７０メートル超えの建設予定地、唯一無二の自然の宝庫である、大浦湾の埋め立て、危険な普天間基地の返還が確約されてない、どれを取っても社会公共の利益を害しているのは国側の方であって、玉城知事の不承認は理にかなった判断です。

日本が真の民主主義国家なら、地域の民意を尊重して、住民が安心して暮らしていける生活環境を守って下さい。よろしくお願い致します。